

令和 6 年 6 月 12 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K12618

研究課題名（和文）母親の国際労働移動を経験した子ども世代の仕事観と家族観、世代間ケアに関する研究

研究課題名（英文）A Study on Work and Family Views and the Intergenerational Care of the Youth Who Have Experienced Their Mothers' Migration

研究代表者

松前 もゆる（MATSUMAE, Moyuru）

早稲田大学・文学大学院・教授

研究者番号：90549619

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ブルガリア村落部の出身で国際労働移動を経験した女性たちとその家族への聞き取りを主たる手法として、まず、2000年代以降に母親の国際労働移動を経験した子ども世代が、成人後、仕事やケア、家族をめぐる実践をいかなる実践をしているのかを実証的に明らかにした。そのうえで、当該地域の仕事観や家族観、ジェンダー規範は再編されつつあるのか、母親世代と比較したとき、若年層の仕事観・家族観の特徴を見出しうるのかを検討した。子ども世代にも母親らを頼って国外で働く選択をする者は少なくないが、同時に、子ども世代の戦略は上の世代とは異なり、家族単位での移動が前提となるなど「再家族化」の傾向が明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、従来は「子ども」として親世代の経験との関係で考察されることが多かった移住労働者の子ども世代に関し、成人後、労働やケアの担い手としていかなる選択をし、実践をするのかを実証的に明らかにしたうえで、世代間ケアの現状、現在の「ケアの連鎖」のありようを考察した点に意義がある。さらに、ブルガリア村落部出身者の多くが移動先で「エッセンシャル・ワーカー」として働いてきたことから、コロナ禍にあって人々はどう働いてきたのか、コロナ禍を経て「エッセンシャル・ワーカー」をとりまく状況や人々の「仕事」とケアの諸相は変容するのか、を考えることにつながる基盤となる調査研究ができたと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study, based on ethnographic research and interviews with female labor migrants from the villages in Bulgaria to other EU countries and their families, empirically clarified the practices of the children's generation who have experienced their mothers' migration after the 2000s with regard to work, care, and family. We then examined whether the views on work, family, and gender norms in the region have been transformed or not, and whether we can identify any characteristics of the younger generation's views when compared to those of their mothers. While a part of children chooses to work outside the country with their mothers' assistance, there is a divergence between the strategies and practices of the youth and their mothers. One of the primary characteristics of the younger generation is based on family-based migration and the tendency of "re-familiarization."

研究分野：文化人類学

キーワード：国際労働移動 ジェンダー ケア 仕事観 家族観 ブルガリア EU エッセンシャル・ワーカー

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の背景には、まず、EU の東欧への拡大決定を契機として 2000 年代に増加した、西  
欧諸国で家事・介護労働者として働くブルガリア出身の女性たちの子ども世代が、学校を卒業後、  
自らも働くことをめぐって選択を始める年代になっていたという現状認識があった。研究代表  
者はこれまで、ブルガリア村落部における、とくに女性たちの「仕事」をめぐる実践について研  
究を続けており、本研究により若年層の実践にアプローチすることで、母親世代との比較から、  
体制転換後に育った世代の仕事観・家族観の特徴を明らかにすることができると考えた。

(2) 本研究の学術的背景としては、女性の単身での国際移動の増加、中でも移動先で家事や介  
護を担う労働者の移動が、「移動の女性化 (feminization of migration)」や「グローバルなケ  
アの連鎖 (global care chains)」を生じさせるなか、これが送り出し社会の仕事観や家族観、  
ジェンダー規範にいかなる影響を与えているか、とくに次世代の視点から検討する時期にきて  
いるのではないかということがあった。移住労働者の子どもたちに焦点をあてた研究は少なく  
ないものの、従来は「子ども」として親世代の経験との関係で考察されることが多かった。しか  
し、研究代表者が調査研究を続けるブルガリア村落部では、2000 年代から、当時高校生や大学  
生の子どもの持つ女性の単身国際移動が目立つようになったため、すでに子どもたち自身が労  
働やケアの担い手として期待される年代となつて久しい。こうしたことから、母親の国際労働移  
動という経験を経て、その子どもたちは仕事やケア、家族をめぐるいかなる選択をし、どのよ  
うな実践をしているのかを検討し、そのうえで、あらためて EU 内の労働移動や「グローバルな  
ケアの連鎖」の現状をとらえ直す必要があると考え、本研究を立案した。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、ブルガリア中北部の村落において母親の国際労働移動を経験した子ども世  
代がすでに一定の年齢になり、労働やケアの担い手として期待されている状況に鑑み、ブルガ  
リア村落部の人々が、「誰が」「どこで」「どのような」活動(仕事やケア)をすることを望まし  
いと見え、実際にはどのような実践をしているのかを実証的に明らかにしたうえで、研究代表者  
が継続しておこなってきた母親世代の仕事観や家族観に関わる調査をふまえて、当該社会  
における仕事観や家族観、ジェンダー規範や世代間関係は再編されつつあるのか否かを検討す  
ることであった。そのうえで、これらをもとに、ブルガリア村落部における「仕事」とケアの  
ありよう、EU 内の労働移動や「ケアの連鎖」の現実を把握することを目指した。

### 3. 研究の方法

(1) 助成期間中、ブルガリア中北部出身で国際労働移動を経験した女性たちとその子どもたち  
および家族への聞きとり調査を主たる方法として研究を進めた。ただし、2020 年春から 2022 年  
度までは新型コロナウイルス感染症の流行により現地調査ができなかったため、以前から調査  
に協力してもらっていた人たちを中心にオンライン調査(オンライン・インタビューおよびチャ  
ットの利用)を依頼し、話を聞かせてもらった。また、コロナ禍での労働移動に関し、その動向  
と移動をめぐる言説について各種報告やインターネット記事からも探ることを試みた。

(2) 「2. 研究の目的」で述べたうちの、とくに については、上記(1)で明らかになったこ  
とに加え、研究代表者が当該地域で継続的におこなってきた調査の成果もふまえ、検討した。

(3) 上記(1)(2)および文献調査をもとに、学会やシンポジウム、研究会で発表をおこない、  
関心を共有する国内外の専門家との間で意見交換をおこなった。そのうえで、本研究の成果とし  
て論考等にまとめた。

### 4. 研究成果

(1) 本研究は、国際労働移動を経験した女性たちとその子どもたちおよび家族への聞きとり調  
査を主たる方法とする実証的な研究として計画されたものであり、当初は助成期間中、ブルガリ  
ア中北部と同地域出身者の主な移動先であるイタリアにおいて年 1~2 回のフィールドワークを  
予定していた。ところが、研究初年度の 2019 年夏にブルガリアで現地調査を実施した後、新型  
コロナウイルス感染症の流行により、2020 年春からは予定していたフィールドワークを延期せ  
ざるを得ない期間が続いた。現地調査が叶わない期間、上記「3. 研究の方法」でも述べたとお  
り、オンライン調査を試みるとともに、研究代表者のこれまでの調査をふり返り、捉え直す作業  
を続けた。後述するように、これによってみえてきたこともある。

なお、フィールドワークは最終的に 2023 年度、2023 年夏と 2024 年 3 月にブルガリア中北部  
で 2 度実施した。というのは、コロナ禍の間にさまざまな理由からブルガリアへの帰国を選択し  
た人も少なくなく、そうした人たちから帰国の理由と現状、仕事観、家族観に関わる話を聞いた

め、ブルガリアでの調査に注力することにしたためである。助成期間中の文献調査もふまえた、本研究の主たる成果は以下のとおりである。

(2) 2019年夏に実施した聞きとり調査と同村落部での研究代表者による20年余の調査から、ブルガリア村落部の「仕事」とジェンダーについて以下のようなことが明らかとなった。

「仕事」が社会主義体制を背景とした序列によって評価され、また、男性性や女性性とも結びついてとらえられてきたため、体制転換後の失業や仕事をめぐる変化(仕事への評価の変化など)にともなう地位の変動(とくにその低下)は、単なる経済的損失以上の意味をもった。

「仕事」は経済行為としての側面をもちろん持つが、同時に、労働者(働く者)あるいは「男」「女」としてのアイデンティティや、父や夫、母や妻、嫁としての立場を確かなものにし、よりよくしようとする社会的営みでもある。したがって、「仕事」は人々が暮らしを営む地域社会のなかで、さらにはその人のライフサイクルのなかでとらえる必要があり、人々の移動(出稼ぎ)する/しないの選択もそうしたなか位置づけられる。

体制転換後の30年、調査地域の人々は、社会主義時代に構築された「労働者」、ある「仕事」をする者としての自己像やそれとも深い関わりを持つ「男性性」「女性性」を、時代の変化に合わせてながら再構築をしようとしてきた。その意味で、まさに「ポスト社会主義」だったのであり、人々は、ある一面では確実に、そのようにポスト社会主義を経験したと言える。

これらの内容は、まず、東欧史研究会シンポジウム「越境する人々の東欧史 ポスト社会主義をふりかえる」(2019年11月30日、於：明治学院大学)において「ブルガリアの地方から見たポスト社会主義 移動する/しない、ジェンダー、仕事」と題して報告し、また、下記の発表や論考にも反映されている。

(3) 研究代表者がこれまでに実施した母親世代への労働移動や仕事観、家族観に関する聞きとり調査を再検討するとともに、可能な範囲でオンライン調査を実施した結果、同じくイタリアで働くブルガリア出身者の中でも世代やジェンダー、職業、教育、さらには移動の時期や状況等によって享受できる権利に違いがあることが明らかとなり、人々の戦略や実践の違いもみえてきた。一方で、この数年、出稼ぎ先の諸外国から一部ブルガリアへ帰国する人たちがいること、また、ブルガリア社会においては人口減少が顕著となり、とりわけ若年層の人口流出が「問題」として語られる傾向にあることも明らかとなった。

以上の調査結果は、16th EASA(European Association of Social Anthropologists) Biennial Conference(報告タイトル“Strategies of migrants from different generations: Demanding their rights, EU citizenship and identities.”、2020年7月24日、オンライン開催)や第12回基礎法総合シンポジウム「人・移動・帰属 変容するアイデンティティ」(報告タイトル「移動・ジェンダー・世代 現代ヨーロッパにおける労働移動の事例から」、2020年10月31日、オンライン開催)で報告し、その後、拙稿「人・移動・帰属」をフィールドから問い直す

現代ヨーロッパにおける労働移動とジェンダー・世代」(広渡清吾、大西楠テア 編『移動と帰属の法理論 変容するアイデンティティ』岩波書店、2022年所収)にまとめた。

(4) コロナ禍でのオンライン調査および文献調査から、新型コロナウイルス感染症の現状が国境をこえて働く人々、とりわけ移住家事労働者に与える影響を「ホーム」という観点から検討した。コロナ禍において「ホーム」は、ウイルスから身を守ることでできる安心・安全な場所として位置づけられたが、しかし、各国での外出制限は、逆説的にこうしたなかでも他者や自分の生と生活のために移動せざるを得ない、いわゆる「エッセンシャル・ワーカー」の存在を浮き彫りにしたことは周知のとおりである。さらに、自身の「ホーム」を物理的に離れ、外国で雇用主の「ホーム」を職場として家事や育児、介護等に従事する移住家事労働者の存在からは、ある人々にとっての安心・安全な「ホーム」は、マイク・ダグラスが「グローバル・ハウスホールディング(global householding)」[Douglass 2006]という表現を用いて指摘したのと同様、家族をこえ、時に国境をこえて移動する構成員の多岐にわたる労働やタスク、関わりによって形成・維持される動的なプロセスであることは明らかである。

このことを、ブルガリア出身でイタリアで「エッセンシャル・ワーカー」、とりわけ雇用主の「ホーム」で働くケア・ワーカーの女性たちの語りから明らかにし、現状報告として、拙稿「移住家事労働者にとっての「ホーム」 移動と「ホーム」をめぐる諸力に関するノート」(『早稲田大学文学学術院文化人類学年報』15: 1-9、2020年)にまとめた。

(5) 2023年度は新型コロナウイルス感染症の流行がようやく落ち着き行動制限も求められなくなったことから、ブルガリアで2度のフィールドワークを実施することができた。その結果、2000年代に国際労働移動を選択した母親世代だけでなく、その子ども世代も、パンデミックやロシアによるウクライナ侵攻にともなう急激な物価上昇等に影響を受けつつ、仕事(としてのケア)と家族のケア、そして自分自身のケアの実現を考慮し、ある人たちは国外にとどまり、別の者たちはブルガリアへの帰国を選択している現状が明らかとなった。母親世代は老親や孫の世話のため、子ども世代は出産や育児、親やパートナーとの関係から帰国を選択する(あるいは、選択しない)。同時に、ブルガリア村落部での社交(事前の約束がなくとも互いの家を訪問でき

る、等)を帰国の一要因としてあげる人たちもおり、いずれも、人生の中で「仕事」とそのほかの活動のバランスをとろうとしている様子がみえてくる。

一方で、若い世代ではカップル、あるいは子どもも含めた家族単位での移動が前提となっており、かつて母親世代が単身での移動を選択したのに対し、近年、家族規範がより強く働いており、いわゆる「再家族化」の傾向がみえてきた。

以上の成果については、2023年9月にブルガリア科学アカデミー附属民族学・民俗学研究所主催のセミナーで報告し、関心を共有するブルガリアの研究者たちと意見交換をおこなうことができた。ただし、2024年3月の調査内容も含めた成果の発表については次年度以降に持ち越しており、今後、2024年7月に開催予定の18th EASA Biennial Conferenceにおいて発表を予定している(採択済み、タイトル“Transnational mobility and return migration of “essential workers”: Care, work, and mobility among Bulgarian (ex-)migrant workers”)

(6) 助成期間中の調査研究を通じ、コロナ禍を経た後の「エッセンシャル・ワーカー」をとりまく状況や、人々の「仕事」とケアの諸相、「ケアの連鎖」の現実について引き続き検討する必要性を強く感じた。また、この数年でブルガリアへの帰国を選択した人たちのように、一定期間(多くの場合十数年)の国外居住を経て出身社会へ戻ってきた場合、人々は社会関係や自らの居場所をどのように再構築していくのか、さらには場所(あるいは環境)との関わりはいかに再構築されるのかが新たなテーマとして浮上することとなった。これらの課題については継続的に調査研究を進めていきたい。

以上

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 松前 もゆる	4. 巻 93巻8号
2. 論文標題 移動・ジェンダー・世代 現代ヨーロッパにおける労働移動の事例から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 法律時報	6. 最初と最後の頁 86-90
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 松前 もゆる	4. 巻 15
2. 論文標題 移住家事労働者にとっての「ホーム」 移動と「ホーム」をめぐる諸力に関するノート	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 早稲田大学文学学術院文化人類学年報	6. 最初と最後の頁 1-9
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 1件／うち国際学会 4件）

1. 発表者名 松前 もゆる
2. 発表標題 現代ヨーロッパおよび東アジアにおける移動、ジェンダー、世代
3. 学会等名 第13回東アジア人文学フォーラム（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Matsumae, Moyuru
2. 発表標題 Strategies of migrants from different generations: Demanding their rights, EU citizenship and identities.
3. 学会等名 16th EASA Biennial Conference（国際学会）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松前 もゆる
2. 発表標題 移動・ジェンダー・世代 現代ヨーロッパにおける労働移動の事例から
3. 学会等名 第12回 基礎法総合シンポジウム 「人・移動・帰属 変容するアイデンティティ」(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松前もゆる
2. 発表標題 「ブルガリアの地方から見たポスト社会主義 移動する/しない、ジェンダー、仕事 」
3. 学会等名 東欧史研究会2019年度シンポジウム「越境する人々の東欧史 ポスト社会主義をふりかえる」
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 MATSUMAE Moyuru
2. 発表標題 "What I have learned from doing fieldwork in Bulgarian rural areas."
3. 学会等名 International Conference "Japan and the European Southeast over a Hundred Years of Political, Economic, Cultural and Academic Interactions" (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Matsumae, Moyuru
2. 発表標題 Transnational mobility and return migration of "essential workers": Care, work, and mobility among Bulgarian (ex-)migrant workers
3. 学会等名 18th EASA Biennial Conference (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 松前 もゆる 「人・移動・帰属」をフィールドから問い直す ンダー・世代」 現代ヨーロッパにおける労働移動とジェ	4. 発行年 2022年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 22
3. 書名 広渡 清吾、大西 楠テア編 『移動と帰属の法理論』	

1. 著者名 松前もゆる 「東欧の体制転換がもたらしたもの」	4. 発行年 2024年
2. 出版社 大阪大学出版会	5. 総ページ数 4
3. 書名 井野瀬 久美恵、栗屋 利江、長 志珠絵編 『「世界」をどう問うか?』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------